席上
之觀

埋根草

五

へ13
3105
5止

へ 13
3105
5

昭和九年七月二三日

席上寄觀垣根草五之巻

松村兵庫古井の妖鏡を得る事

南勢大河内の郷べその郡に國司の府にて南朝の頃までは北畠殿ありて一方を領したまへ國府の西南に大河内明神の社あり國司ら崇敬修理したまへ神領もあまた寄ら[illegible]ぶく寵愛して嘉吉文安の頃にいたりて社頭も兩殿より仏かたたまふ風情あり[illegible]ぶ祠官松村兵庫なるものの都より登りし時の告領細川家に由緒あるにたりて修造のまと術入ることいへども前將軍義教公赤松ぶたなよ弑せ[illegible]たまふ後嗣ぶ[illegible]ぶ早世あり義政公將軍の職を継たまへ手續て公のまま繁きに其事とあくすぎ侍まつ兵庫かとりの文才かくれなく和歌の道ぶども幼より嗜ぶ[illegible]ぶ事に[illegible]留りて其奥儀ともきわめたんと京都今出川の花亭寓居して公の門法

と待居たる旅籠の素性よわりて、この古井あるてむしばら時くらく人を
頼みすまきて仕まづも宅着とそもあく後者一人のあまをば仕も換まず
苦しうる其頃幾内大う早しく洛中も水に乏しく折にも、この古井の涸
ることなく水藍のごとくこと仕まづと隣より汲る者多しとなども人く
ひしく、汲出しも頼く者もあるに或日昔の頃隣家の婢例のごとく
汲んとて久しく井中と覗に居たるあやとうろうろ忽陸上りく
頼まれ仕に井水さらえて深さまづ數日と仰く汲くるの九盤と
ることん得ち是ち兵庫わやまちわんまと怖きて垣ゑ巌くを
うへたりしが云てもあてとなく仕ちたりて竊に覗ばけば多の頃サ
ぐりしと苦しき女のなきを見るが粧飾いとうるく粧ひてあり兵庫をこそ
まし頼とむけく笑風情その影ある事世のたぐへにあらず嬉ゑて

わ[illegible]くちくちんとせしがたとへあらりて知とかくして人と頼う
と古井の妖なるべしわかとそもとと思に立ちて後者に此くかく物
して色々と或夜二更の頃ち風雨ちかぐ烈しく物本と怪し屋
瓦を飛色両の盆と傾るごとく閃電晝のごとく霹靂とびくく震
ひて柱も折け地維も崩るかとたちて大晴く夜も明ちよ兵庫
やく起て窓と開て外面と覗ばかる表に女の形して案内とそ入雑
とこそ孫生と苦く兵庫わやまちあぐ裝束して戸を立ちと間ち指ぐ
ことまとうんまとびたんに井中よりあり女ち兵庫ぐ云世昔の井中の人にあらぐや
仕ぐぐぐに人と寒て報とる女云妖人とろに者まあらば此井毒龍あり
むしばらとそこにけむ西よ大昇とびくも水かくまあ妖者井に陸て
遂よ龍のたんよ使ぐくまもとを仕ぐくくもとを仕て人と惑く或い

蓋衆雜貝の類を以て歌さすして蛇の食べしものよ供するの義
人血をもつて妻とすべしと奏ぜしむること幸若殿ぜしめ昨夜天帝
の命ありしことをもつて信州島居の池よりしめ井中主の此時
居人をして妻を殺して井を埋めしめ眼をくりぬきて殺すべし
なんぞ〳〵いへ終りて行方を尋ぬ兵庫數人をして井をあばかしむるに水
溜く一滴もなしさてこそ井中他のものなり唯等閑のこゝろあり溜く
底まで〳〵一夜の古塚あり〳〵わしはこれ背に姑
洗之鏡として四方の歌識あり三の弥生とつゝしみ此中に香を焚て
其穢汚を清め一重中に安じ一間なる所を清き所を拭ひ尽
安入ありて三〳〵器の力にもつて數百多の苦をあぎまて世より出ることを
待ちて人不浄を清めて穢をきらひたまひ四月の昼穢をきらひたまひ

此井いむ〳〵大なる池あり〳〵を遷都の時埋めたまひ溺形だらとのて
たまへ都を遷しなまなきえ八百神の神ぐらてたけ多四其むりより
すきたり毒蛇もなんすべ〳〵し井中をとりたて多人侍り妻に赤川明天皇
の時百濟国よりつきれて久〳〵宮中に秘めおきてぶ嶮山我大白王のことよ
皇妃賀茂の内親王にはなりまする後兼明親王の詩よ侍りて菅原家
に傳りて堂殿にて秘義なりたまひしが其後係元の孔よ語りて此井に
隆そもそも長く毒蛇を責にたまひて今日よりて十二律にかゝりて侍りたん
らく中毒に二月二日より侍る不の物あり君妻と將軍家にて先生で大
なる祥を得るべし其上此所久〳〵すまたまへ所よりあべやくかに侍ることを
知かりて行てかきけたごとくにて其形をとゝべ兵庫の詞のごとく唱ふ
移りて半のもとを覆ひて次の日なくして地をとりて家山脚より西も後の

垣根草巻之五

百眼金巻之四

霊仏に報ずるところとなりてこれを将軍家にまゐらせのこころ
義政公古翫を愛し給ひ珍重ぶかくおぼしめされ
であるゆゑに侍りけるとぞ第一の奇寶として南都
にて一ケの庄を神領にしたまひ社頭再建ありしかば法隆寺の裏
金とかゝりて無庚申のごとく多年の願成就とぞ
あらまし大内の家に賜りし義隆卿の絵にその所をもとめてぞいと
にくく侍る

千載の斑狐一條大閤を試むるまで

應仁の乱に京都は曽有の至変にして元弘建武の乱にも類へがたし
五畿七道ことごとくさわがしく雄峰のごとく起りて名門より割據
し人民を苦しめることは唐土の戦国とかやもかくやとぞ思ひ
侍る

公卿殿上人はさらにこれ身をもてかゝる命を保ちがたく老少を他の郷邑
はたまた一條左大閤兼良公いとの後を求めて江州に乱を避けたまふ公はもとより
古今博学の大才にして其情識人にすぐれ詩文和歌のみちも
まで一時に有を比ぶる人なし書畫子訓花鳥餘情竹林良材公事根元
あまた数多の書をあらわし後生の伝ものとなりて常に不朽を抜きたり
永享五年の頃より勝れ給へる公の官右府よりさきだちて家の相関より昇
ると雖公は其家をもとより摂関の家なれば代執柄の家なり雖
公は唐土の事は李唐以前のことをもとより李杜のまれは延喜以前のことをもとしたまふ
和漢の古を知りのこれる李唐以後延喜以後の事をもとしたまふ此二條彼公に移り
ども後世永とうたへることを公の万分の一にもおよばずとぞ遺恨なれや宮人
より時の人を閣を請もとめ給ひ公の画像墨絵あるべき悔りたまふ

仏門あるのあるべくもあらざる不奥〳〵ながらまで自〳〵学ふ
誠に衰世の人才とぞ〳〵されども政務にうとく武家のよにわかつて
なほふことあるべき徒よ虚位をもうなしみて身を五体に所なく江
濃の間よさすがあるさまなれども草莽より身をたてたることを不幸
なる頃〳〵も愛知りのけわうに塾居〳〵なれども茅ぶき軒
都をもとめび徒然を慰むれば編戸をかこづくるのあを
雖ども人なべ多頃世ぞうの世多身にふれ布とまことに眼ばかり
あるく骨相の奇あるよ世のあるの村夫にいわるゝと誇〳〵たまくび安多
ることあるく存よたきて系い此門上高郷のやうに住侍る草屋仍系とも
者あるが幼より書籍に好こみ多巻を釈侍る孫ども寒村のかあるを絶る
べき師友をもあることあるを孤と侍るよりかばも君世多よさ〳〵

まんとをうけなるうてもまいかうとび推て多りたまをつたを関よるべ
て真そのおもをもと試たるよ和漢のそもを博きこと海のごとく辯舌
水の流るゝごとく左国天りたて天下の奇才ありと再三称ゆ〳〵
竹多謝て云おくあるべきもの名雷霆のごとく偏意
ごとくも幼ちてまを仰ぐ今試り五三を問いまんとも四書の名程朱
に出でる論あり大そ中庸の二篇を表出〳〵るいたるの時よりもまん左国云
程朱ぞ載記のやうと表出て四書の名出ちり安多云晋の載顕
中庸傳二巻を作る又梁の武帝論疏一巻制旨義五巻と制を宋の
仁宗王安石に中庸一篇を賜ひ呂臻に大そ一篇を賜ふ〳〵と伝へられ
ばかりんぐ程朱と侍るやを左国其精敷に仰なまく又云西山の中国よりの里
の時やせんを国云五代の時胡嶠と者戎の地より程とをり帰てをぞ

中国より西瓜あり甘瓜云とゝ志ぐべ深の武壽西園に緑沈瓜を食てとある
仔細あるや左園云ふあゝ又云竹実は鳳凰の食するものとて〳〵ぶゝ〳〵近頃
多く生ずる所の竹実なりんや左園云いまゞ考へゞ甘瓜云竹実二種あり鳳
の食ものいろさ鷄卵のごとく其味蜜にまさるとゝ此方に生ずる所
江淮の間に竹米と呼ものよりて生ずゝ其竹云〳〵ぞして佶とて唐詩
に餓死竹生花とゝ〳〵ん〳〵て漢寿の北あるとて李時珍集に載たり竹花
なりんや左園云ふあゝ又云曹操関羽を漢壽亭侯に封じたるとゝ左園志
にゝ〳〵たゝ字義いんを左園云いまゞ考へゞ甘瓜云蜀の蜀道に漢壽といふ
地あるゝ〳〵なれ漢壽亭侯に封じたるものと後世漢の字と世の名やゝ〳〵て
壽亭侯とゝいわゝ〳〵ぞや左園言葉あゝ又云論語に紫の朱を奪ふ
とあるとゝ〳〵紫と朱と何ぞまゝ〳〵考へゞ甘瓜

云宋仁宗の頃より紫を深て紫草を多く用ひて紫しるく是
永興清る要の紫あり古人の紫い深るに青とするとやゝなく紫草を絞り
用ひて紫紺を紫ことゝ〳〵と知べく知べく唐云も深緑の頃より紫ふ
いろくよ後して北紫とゝ〳〵ゝるゝ〳〵と世人まゝ〳〵深る不の紅紫あゝ〳〵第と
奪ふと言ゝ〳〵ぞあゝ〳〵ぞや左園と言ふあゝ又云永興詩のゝ〳〵まゝ誰人ゝ
志ゝ〳〵左園云大津皇子あゝ〳〵ぞ甘瓜云大津白三首ゝ〳〵
だゝ〳〵大友皇子河島皇子とゝ〳〵ゝ五言の詩を作ゝ〳〵ぞ大友敗亡の時を
悲ゝ〳〵ぞ〳〵なゝ世のゝ〳〵ことをゝ〳〵ぞ日本紀にも載ゝ〳〵ぞ偏とゝ〳〵ぞ左園言
ふあゝ又云羅城門の名いゝ〳〵ぞや左園云いまゞ考へゞ甘瓜云羅城門羅郭の
少ゝ〳〵同じゝ〳〵意ゝ〳〵ゝ外郭あゝ唐の懿宗の時羅城を築ゝて注に外郭あゝと
ゝ〳〵平安城外郭の門あゝ〳〵ゝ〳〵ゝ〳〵ぞ左園云ふあゝ又云不當踏を

美濃の地なりや信濃なりや古関と云信濃なる木曾といふを以てこれ信濃なる
こと論あり 世尊寺家和仁等の頃より両国の境を論じたることあり 勅
使をもつて美濃の地なりしと定めたるより 其後信濃に属したるまゝ国史
にも見えて すこぶる古関なるに 守りかたき小冠者に難殺せらるゝことぞやすかる経
たがもせらるゝせんすべなく沈みしたまひ 忽ち計を生じて云女房和歌さへ
女房云幼より是をたのしめども 云よ近世軟弱華靡の躰ととのはず 世の人
言葉の前栽の花として 生色なしといふべし 東流行ように かは古関
云懐中詠草ありや女房一冊を呈し 取らんとするに誠よ秀逸にして たけ
高く詞すぐれたり 定家のいはゆる 正風ぞと 歎じたまひし 風調なり
古関巻を収めて云女房全才と云べしされども和歌は其門によつて国の紙
をとゞらせ 詠草を遂に近ありといへども地下の風なりとて 嘲り

たまひて女房答て云君の賢明なる 猶流行の歌を執したまふなれども 比
と貴く丸赤人 地下なれども 貫之躬恒が輩は地下の諸官 和歌式と定めて 寂
仏は姓氏もさだかならず 此家門の一時の風をまなびきさんとせし 西行は北面の士の
入道したれば 侍すや人の和を寵とするは 貴賎の差別あることの あるべき
輩を先達とする事なれ 雲井の上にも 春秋を詠じたまひても 賤が家に打ち梅
に霞を見る夜さへ またらはくさきぬるに 差なきものぞと 行末を給ひける
もなよかけに遠く侍るべきなれど 此の歌をつげしかれ月雪花も同じことなれ
ならめものを 貴賎の差別を論ずべきやと よくれ 雅俗あれて 古今を論じ給ふ
浅深ありて優劣を定むるのみにて人の貴賎をもつて論ずるものにあらず 地下
堂上のことをもて 朝家に政務は出家にあって 其のちにて もつし
かくさ論 其禄の家より地下の寒微の家にも殿上に登るありて 内

[illegible]の名たかく貴賤の名たかしとて[illegible]孫[illegible]うそ[illegible]虚位
に居なりてうきぐの流風世を[illegible]或は和の家[illegible]の[illegible]技藝を学
ぶ[illegible]百[illegible]能を[illegible]なりて天朝の大臣[illegible]
[illegible]衰世のさまやもとあさ業[illegible]のごとく[illegible]古々の[illegible]
達[illegible]まを眉間[illegible]の大[illegible]
[illegible]ぐ惜[illegible]園公[illegible]ごとく面黄なるうら[illegible]
のうへ[illegible]此女[illegible]必非者[illegible]
[illegible]剣と[illegible]一振を出て廿[illegible]
やし[illegible]女[illegible]て[illegible]魂[illegible]狐の[illegible]
[illegible]天地の[illegible]奇才[illegible]衰世[illegible]
[illegible]のごとく[illegible]世の大才を生ぐ[illegible]後生の[illegible]孔[illegible]

[illegible]剣に陽よりて威[illegible]鬼魅に陰[illegible]
[illegible]逼[illegible]其奴鋪[illegible]
[illegible]陽よりて明[illegible]積に陰[illegible]
至明の達[illegible]其形と[illegible]露[illegible]
奴[illegible]の後と[illegible]抱朴子世[illegible]と論[illegible]
君此二[illegible]試[illegible]
[illegible]云耶[illegible]女[illegible]
沈[illegible]女[illegible]
[illegible]及[illegible]張雅の[illegible]
[illegible]一間は退[illegible]園[illegible]
[illegible]世の後才[illegible]鬼魅[illegible]

妖狐あべし永間千載の妖狐へ金錦とも化て呂千年の古木となる
時へ其形をあらはしつゝ千年を経る古木やあると陰家の翁とも化て
ひとりよりの昔ものがたりの仕のかたり
侍りしかの古園ちらべ化まん村主の知たりける者をうして今千年の
年を経て真古木ちらて得ると言ふ諸て出行ものとなりぬ
まのかたりの翁一人化ものと化行まの名わりてかく夜半ものはかり化まの
人ともなる化侍りしかちまとちりそんなんよやしかよ両人の者ども孫ども
かちらしかちの翁ちはまくちは是とかちまの岩山奥荒川僕のかちの落尾
とりよ千年と行ちる老狐の侍りきよ此よ巻てちまと頃一條右園愛知川の
名た難居しかまへ公い情そまの名りとあく方り類ふあと自屋しかの人
ちの試ちに見ちて左の情識とかやまし鈴乳と折ちんたちかしちと行ちんたちと

鈴ちしかの年ものとしる史家淵て云汝ら才智流辯天下たまを敵する
者のんち右園服しかまんて明らかちあり只ちちくい奇禍ち逢ん海のくいわり
此其餘殃ちと連累ちべし其時悔ちとも及ぶ先ちとちくち徳とかくし
て天年と保ちたんとて年ちとあるとも草木花ちりきを以て折ち虎和尚の導
あると行て知ちる史玉体けやく井泉の竭やすい汝ちの王と怪く深ひたのど
むの徳ひわんと再之制ちかど用ひでしてまりの果て猶家たもたんべち
ことちとちて化之がさけちでもくに行方と手ば村人わちて先ちもちやちう
時ちてきさまとの及ぶまいぢやと彼化を切怪しく来の者ちとちかんちてあり
しまちもたまちんちた右園ち諸ちまりまちまび知ちて老狐の猶ち疑ひ邑
と次の間ちてかの翁と知しかまの人ちの熟時ちる女ちわちて女ちの班
狐妻戸蹴ちあしく迷ちと村人ども持ちる斧ちく巳刀ち女ちしちあり

左園云かさず本形をあらさしめて流樹と折んにはんあるべき千載
を待る靈祇と仰よ新しかるべき使をもて後に歌に曰く
もろこしを飛しかしらも生人紙屋しなでかるよわるべきて後都もて
新あんとせしかは左園も法を仰しかしかが社頭のたまとをもてかしこ
とも謝しまんとて手賀よ諸で参拝神示ひ紙行しかしかまの
もをかしかりて
こをかの生たが世よかりあまて神をにうあけの玉垣
今人只猿を盤居しかしかまて柳て生人のいるをまた
諸の侍人仕の都よかりかしかまの文明のるを光より国新繼にはしかしか
文明一統記と若しかしかまの天皇とをもて場よ入道しかして侍関
で待しかる誠よ余世の大才不幸にて関家陽九の運しかしかしか

こて遺恨の生ぶ博識の長しかまてしかしかしかの辞あいの
世よ侍しかしかまてまくの新渡古くの序紀行の詩あ侍く世よ使くしかの
千後左園常く斑猫の手をかりて咲歎しかしかまの記をしかもしかしかとで
環人見春澄と撰しかて家を撰しかしかしか
むり小野皇女かり時久宰しかしかは侍人奥州の侍よ兵子と調練仕
其子孫ましまて関東にありて武州七堂の中岡部人見あるは其末にはしかしか
馬の業と称しかしかしかまの民部春澄あるもの下野国よ数千町と領
しかて北條家のたくよ藩籬と守しかしかしかて高時の代よいたて聊の過よりて所
領を没取せしかしかまて安しかしかまて男子しかしかしかまて国よあんも面目にて都
登り権門の推挙をも假しかしかまて家の両人と同しかして奥と称
都とゆくして登しかしかまて本曾の際ひよかりて馬蹄人事と跡で半天よ登り

かくおどろき人影を水に映して不測の淵より下をのぞけども雲霧わ
ゝとうづゝ前途遠よりて馬人とも疲れたりよろめくと驚き合ども
命ごら日も暮れ流れていぬ木立晴さゝやかなる下より数十人の山賊
路を塞ぎて衣服物具を剥取んとす民弘怒りて高声の類しをあ
やまり命情くれ路を開けと家のよ請乞切実すれどかうとんじ
ゝ賊二人を切倒し乃勢に乗じ餘党へ襲ふ民弘勝に乗じ
晴夜あけども跡を尋ぬ一町ばかりも追ひ来れども跡の魂
ら五六人おくれ出で前なる者もあれ人ばかり従者に後れ死し民弘
遂に生捕られて数十人取囲て賊寨へかゝるを頃王澤の已に絶て国内方
威りく鎗倉の武威もとゝの我意に舊習と違ひ非道の政ゝ多かり
天国に盗賊起りて守護の下知を慢かゝ列弘を侵掠せり錦部次郎宣重

もと云者賊主となりて部下に数百人を投聊に不習の山奥に山居を猫
数年その威を震ひ次々に弘の赤より西家に少く多難あり賊徒
旅代の誠も皆同者に盗時と得て国中を荒し民怨
生捕られしも錦部の部下の者にて賊主の者より出民弘
風情の者なりよりて出身を乞ども弘いふ
別屋にとり入て次の日自らさゝ公界の風雪ふく武門の豪族みん
富や北條家の政虐ともゝ国を乱し天下を乱す者三人を伐
居し吾輩の者のとして賊とせんいあやまりの時の変化ともゝ
かくして居る事あり君も世のよ出でゝ下半世のなりとをとす
ひとゝ民弘も源倉の政ゝを怪ゝ家遠もとゝ出仕ゝ
新く世にあて時に伐んとて弘世の工策をもて領当すれば賊主は

二人の男子生じたるを酒を酌くそなたと定むるを乗此山寨へ入りたるを
ちらぐらく文字とうたる者も多くかくて定めてどやうち民部丞と言
野を流し殺し強奪し酒宴を催して明くれば耳目の聞るを
切名の名も弛まりてよき安堵の地と得ると心あらんて者ども弾部ば
使女のうちより環と言る婦人あり容顔美しく酒宴の
席にあつて酌よたちる民部丞の妻の者の勢ひも似ざりう
知ぐ生れよりあるぐふてあるとび民部丞さうてうちとみたりうよりあり射人あり
形を家いとをよりて者あるとうえまりをよりて武門の名を重し
行ふてかる山賊の中あるて年月をたりてやうやうとなる所内
よい捕りうんざ人あたりて軍を起し西国より赤松城を守りて官軍あり
しかる時にて家とも奥し名を揚たまふべきよりて時を待かく

ちる者よいそうたまふと謂るよ民部丞大ほもとくも世世の外ありしく
以ふあり鎧ぬが永久と掠んたたい色ちるなんん詩ぬたたく後とりて
父ちるよ思いたちて只ちあるき居て其夜深夜にしむるひあり手わるもと
かりて俗わの女なりとへば弾部其姿あるさまをとりてこの環とよびてその
微きあると怒りたりくいまーそうち貴後見と行く人あり冷て環をうの男
さたりやたりと生にさとたまふ女たりとさまでも妻が身はまるさ
者ふまいん待ばあるて十金の軀を石丸に同じくたりを生たまんこの外さ
にしまたあるうちくうたまるまで拭ふ家居ありまるで流ふ
或ど其詠あんとうを捧げてこと謝ふ教も其日ち勝のさたるさくく功名
以あり日夜よ繁をさんすとたくとも賊主用外ぐしたるとば乃
費も調ぐしばふあーぐ生りたると謂るよ環国よ入りて生りうの紙紙をさか

其ノ民部に成て其家貧窮貯乏なる中ころより身のよすがの産なりし所の二番
に新しき人民部いよく其家富と感じ考よ迹知ることなしやうよ
そなるべの山にとん男に生たるまゝ女と男したまゝ男の男山
児々妻の身價つまで償に侍る孫ゞ孫ゞ輪くこまるべ妻と金くたまくく
今一日をて不迹なる人妻ゝにて紡して別きの民紡環よ
徼せ生てるく彼ゞ家ゞ小ゞ染して紡ることを行て山寨ことの出く方國とし
て庭のびなる錦新かくともをで物のごとく潤寨と行て環よ命じて民紡と
まゝ孫ゝ山環民紡ゞ房に至て其影迹をよこかくも迹知よしと
ちて婦ゝて今ちしも男るを侍ることて臥ふくて孫紡疑をくを夜明
てゞ出をこんをゝて人をて追ゝ山をゞも行方をゞ環ゝよすをたり
ん俗をゝにくを出をゝ人ゞも男ゞ若ゝ孫紡怒て昼夜ゝを所憂

して後ゝ出ゝく捨ゝ出ゝて狼ゝの人ゝの眼よりゝと命じ居ゝと山寨の者ゝ
ゝちて人家ゝをゝ捨て行ゝ及民部ハ昼夜ゝを行ゝく方國ゝ下向行ゝ
ゝに頃ゝも新田義貞大義を伺ゝ兵ゝ馳加ゝて鎌倉ゝ攻ゝ
に家運傾ゝる北條處ゝの軍ゝ敗れ長崎ゝ勝田ゝ二方ゝ防ゝも
駐兵ゝ者ゝく実ゝ引色ゝ人ゝを民紡ゝ陣にゝ士卒ゝ勇ゝ中ゝ
取圍ゝて攻ゝ逐ゝ長崎ゝ取高時ゝ自殺ゝて孫倉平地ゝ大高還ゝ
ゝて海内一統の時ゝ至ゝて義貞の推挙ゝて本領ゝ移ゝ上出羽ゝ
一郡ゝ成ゝ人見十野寺定法ゝ成ゝ人見ゝ蟄懐ゝ成ゝ人見
いゝく環ゝ志ゝ感ゝ人ゝ成ゝて山寨の動静ゝ窺ゝ成ゝ項部下の者錦
部ゝ云ゝ成ゝ悪ゝ成ゝ者ゝ新ゝ成ゝ逆行ゝ成ゝ環ゝ身の累
いゝ成ゝ成ゝ安ゝ成ゝ昼夜ゝ捜求ゝ方便ゝ

日と送るうちつゝとも北山足利の確執出来て足利の一族人見六郎
新田は屋に足利を攻て東国より下て數多の敵に新田利なくして都へ
登れば人見六郎は東国より下て奥羽の国司北畠と相議して奥羽の勢を催
し上洛して足利を攻て西国より追落す故新田も其忠戦を感じて新
田ばかりに成て定まる妻もなかりしかども聚て後嗣とするなりとて
すゝめられて人見六郎は環ごとつゝまれて妻をも迎へて暫く養ひ
どゝく足利大軍を催し攻登れば新田敗れて北国へ走り主上も南へ
行たまふて人見は再び宦軍を催さんと欲する頃なれば
一族の内岡部新右衛門成国なる者に娘と人見に聚せんことを求む人見も
環清恩を忘れず六年に成れども影響をとゝまれば今いやむことを
得ず後嗣とのたまひんも又得の罪人なりと領掌して岡部新右衛門

右日と為るゝ婚儀を調へんとて婚姻と水を呑ん事を強ひ奉る者人一婦
を連れるとく地則ち者にて岡部隈なく探し居れば人見と通ずの
事有るを聞て岡部が能よ其女の妻ごとの婚君とて私語するを
新婚も地獄に成しかばやがて二間に走り入て久しく出ず使女等い
ふ様ゝ猛死したりとて主の岡部に告げるに主の岡部は
ゝ使女を呼て問ふに其婚君のいふ所を尋ねば
のごとく有て人見も行まやんと行まで岡部もあやまて語り居る
ちゝめて針茅の中にあて息出て人見すて醫師と試ることを
あり猛死の者にて岡部諸去一間に至りて
猛る婚に山寨にあり環を
行るとて行ん行と語りて手流行て来るを

旦夕げに旦夕ごとに人々に仕へて涼みをとるべく世間よりも
よしなきまでも侍べるかとなくさみて むしの名をもつまきの丹をしる
べくもおろかなる人者れい鑑の婿君にあらせたまふの家こそありてい侵
つて悪しく扶をひこそ出でたるものとなまじひよ命あるて春の體面とも
称しまくもまの恐しさよとて子よ国紀大り移る歎えむしようち托ぐこと
辛伍絲織のけよ擢こ玉ひ例い侍べるかく時変をさやて英雄と激
し身婚妻の戦役をとりて後家をとそ戦に死すること宮よ出でぐ
くなりをの異国にて真例をさうに女子の列よ夫とりべ妻ん永娘の世遠
親ん立まびりまとなく環と者よ娶せん永娘い妻とこなまとりて環
泣て是と結しとうけがて人見ものるに言ふなる者よ新田義貞を頼鎌
ばまりくたりしぶ此世を国て天下の戦国紀人に譲んもかなる孫環いまと

まりて戦女とて人見よ娶らべし国部の息女い二室ともらべ諸侯実
さぶまりたる數あり二妻二妻行べ嫌しせんしいまるに侍べるなしと国部し人見
恩と謝して主織に随さてれかめて者とトして三家ら新人と送りく
婚儀と執行ふ人ものまぐく姫忌乃人をるく環をの嫡妻の者とうまれどと
謙遜すまび国部が娘い其まよ功あるもて賢操と崇べてまりも軽慢
ぶ人見もるかとも親しまを孫宗て南朝ちびまなまし後も紀族ま
まびまて足行家ものも敷く損益すまやわまび所領悉く安堵し
て世べたく業へたりまーやべ

席上奇観垣根草　五之巻終

明和七庚寅年六月吉日

堀川通佛光寺下ル町　錢屋七郎兵衛

同町　近江屋庄右衛門

皇都書林　梅花堂藏

同綾小路下ル町　錢屋庄兵衛

寺町通高辻下ル町　菊屋七郎兵衛

同通松原下ル町　梅村三郎兵衛